

中部小動物臨床研究発表会 20 回を振り返って、 そして更なる飛躍のために

金本 勇[†] (中部小動物臨床研究会名誉顧問・茶屋ヶ坂動物病院院長)



1 はじめに

今回、中部小動物臨床研究発表会 (中小臨) 第 20 回を迎えるにあたり、その区切りに初代代表としてこれまでを振り返って、その当時の経緯を若い方々にも知ってもらうことがこれからの中小臨の発展に繋がると思い、ここに記録

として残したい。

2 茶屋ヶ坂ゼミナールの発足：動機と経緯

(1) 私個人の動機

私は 1968 年に名古屋市千種区で開業し、今年で 43 年目になる。開業当初は小動物に関する教科書も僅かであり、経験によるものが主体であった。そんな頃に開業に自信をなくしてもう一度勉強をやり直そうと思い、縁有って当時の名古屋大学 (名大) 医学部附属環境医学研究所 (東山地区) の獣医病理学者である故 千葉胤孝先生 (北大卒) のもとにほとんど毎日午後無籍で通った。死亡した動物の死因を確かめるためである。それから 1 年後に無籍で出入りされては困るからと正式に研究生を許され、「犬の発生」のテーマをいただいた (金本 勇, 他: 名大環研年報, 21: 251-252, 1971)。

ちょうどその頃、私が経験した「犬の先天性心疾患の動脈管閉存症 (PDA) の診断と治療」に本邦で初めて成功した (Kim Y & Hara T: Jpn J Vet Sci, 36: 299-309, 1974)。これが修士論文に値すると評価され、今度は名大農学部畜産学科家畜解剖学教室に移籍することになり、故 保田幹男教授に指導を受けて 1980 年に「犬の心臓および鶏の心臓刺激伝導系の形態と発生」の研究で農学博士の授与を受けた。またこの時の学位審査で、前述の PDA の論文審査のために名大医学部第一外科の故 弥政洋太郎教授が外部審査員として入り、これが縁で今度は名大医学部へ移籍することになり、今日まで心臓外科を勉強する機会を与えられた。

(2) 茶屋ヶ坂ゼミナールの発足経緯 (表 1)

このように私は若い頃より、大変幸運なことに良い指導者に恵まれて指導を受けたので今度は自分が若い人にチャンスを与える番とならなければ、と強く考えるようになった。ちょうどその頃、千村取一氏 (千村どうぶつ病院) が愛知県岩倉市で開業され、循環器に大変興味を持

表 1 中部小動物臨床研究会の歴史

1980. 5 (昭和55年)	心研ゼミ (開心術) 開始	茶屋ヶ坂動物病院
1982. 3 (昭和57年)	茶屋ヶ坂ゼミナール発足	茶屋ヶ坂動物病院
1988.10 (昭和63年)	三重小動物臨床研究会と合同発表会 (1 回目)	名古屋市獣医師会館
1989.10 (平成元年)	同上 (2 回目)	桜華会館
1990.10 (平成 2 年)	同上 (3 回目)	桜華会館
1990.10 (平成 2 年)	茶屋ヶ坂ゼミナール 100 回記念	名古屋市獣医師会館
1991.10.27 (平成 3 年)	茶屋ヶ坂ゼミナール・三重小動物臨床研究会・一般・合同発表会 (4 回目)	名古屋市獣医師会館
1992.10. 4 (平成 4 年)	第 1 回中部小動物臨床研究 (中小臨) 発表会	愛知県中小企業センター
1999. 1.17 (平成11年)	茶屋ヶ坂ゼミナール 200 回記念	名古屋観光ホテル
2001. 9.30 (平成13年)	茶屋ヶ坂ゼミナールを中部小動物臨床研究会に改称	
2001. 9.30 (平成13年)	中部小動物臨床研究発表会 第 10 回記念	名古屋国際会議場
2007. 3.11 (平成19年)	中部小動物臨床研究第 300 回記念 (代表 千村先生)	ローズコートホテル
2011.12.11 (平成23年)	中部小動物臨床研究発表会 第 20 回記念 (代表 森島先生)	ローズコートホテル

[†] 連絡責任者: 金本 勇 (茶屋ヶ坂動物病院)

〒464-0003 名古屋市千種区新西 1-1-5

☎052-773-1866 FAX 052-773-7488

E-mail: kanemoto@ta2.so-net.ne.jp

表2 中部小動物臨床研究発表会の歴史

回	実行委員長	代表	副代表	編集委員長	事務局
1	—	金本 勇	千村収一 森島隆司	豊島博昭	茶屋ヶ坂 AH
5	—				
6	—			石川(甲斐) 勝行	
12	千村収一				
13	森島隆司				
14	石田正弘				
15	岩本篤司				
16	石川勝行	千村収一	森島隆司	原 晋一郎	千村AH
17	原 晋一郎		石田正弘		
18	豊島弓子			桑原康人	
19	長屋好昭				
20	倉地広樹			平林弘行	

たれていたもので、一緒に「低体温麻酔法による開心術」を5名で始めたのが勉強会の始まりである。当初は「心研ゼミ」と呼ばれていた（この時期に行った犬の僧帽弁形成術は、獣医界で世界初の成功例（Kanemoto I, et al : Jpn J Vet Sci 52 : 411-414, 1990）となった）。

若い臨床家を排除するような当時の研究会のあり方に疑問を持っていた。そのため、仲間の若手獣医師同士が当院で第2土曜日夜9時から深夜まで、症例を中心としたいろいろなテーマで順番に発表していたところ、ほかの動物病院の若い獣医師がどんどん集まり、1982年3月に茶屋ヶ坂ゼミナール（茶ゼミ）として正式に発足することになった。その後当院では手狭となり、会場をオオプラザホテル、その後現在の名古屋市獣医師会館へと移動した。

1990年10月に茶屋ヶ坂ゼミナール第100回定例発表会を迎え、記念講演（当時：小動物臨床研究所 山根義久所長）を行い、第100回記念誌を発行した。1988年10月からは茶屋ヶ坂ゼミナールと三重小動物臨床研究会（三小臨）との合同発表会を年1回持つようになり、4回目の1991年10月には、茶ゼミと三小臨に一般を加えた合同発表会になった。そのため、この合同発表会を発展的に解消し、1992年10月4日に第1回中部小動物臨床研究発表会として名古屋駅前の愛知県中小企業センター（現：ウィンクあいち）で開催するに至った。また2001年9月の第10回中部小動物臨床研究発表会を機会に、茶屋ヶ坂ゼミナールを中部小動物臨床研究会（中小臨）と改称した。それ以後も従来どおりに、定例会は毎月第2土曜日夜、発表会は毎年10月に開催され、

表3 当発表会の特色

- 1 臨床家による臨床家のための臨床家の発表会
 - 臨床家の主体性を保持のため
 - (1) そのために中小臨会員が中心となって会場を設営・運営する。
 - (2) 発表会は臨床家の基本である症例報告を主とし、講演は副とする。症例発表は各病院で担当した先生が1例1例の症例を大切に検討した結果である。
- 2 若手の臨床家を育てる発表会
 - (1) 当会は研究会発表であり、学会への（二重）発表とはならない。そのため症例報告は若手の臨床家を育てるために勤務医、学生の発表を優先し、院長級にはその後のレベルの高い学会に発表することを薦める。
 - (2) 発表者は、原則として座長も引き受けていただき、経験をしていただく。
- 3 同じ志を持つ全国の研究会に後援研究会として年1回の共同発表の場とする。

現在に至っている。

3 中部小動物臨床研究（中小臨）発表会の経緯

上記のように、1992年10月に名古屋駅前の愛知県中小企業センター（現：ウィンクあいち）で第1回中部小動物臨床研究（中小臨）発表会を開催してから、今回で20回目になった（表2）。

本会は全国の研究会の共催を得て、年1回の純粋な臨床家の共同研究発表会の場として発足した。三重県小動物臨床研究会をはじめ、岐阜小動物臨床検討会、志学会（関西）、東三河小動物臨床研究会、日本臨床獣医学フォーラム、（財）動物臨床医学研究所、九州画像診断研究会、八仙会（九州）の後援を得て今日に至っている。

本会の特徴（表3）は、「臨床家による臨床家のための臨床家の発表会」である。そのため、運営・設営は中小臨が行い、臨床家が意見を述べやすいように座長は臨床家（原則として発表者）にお願いしてきた。また若い臨床医の登龍門となるように、できるだけ若い勤務医に発表の機会を与えていただくことを推奨してきた。ここで発表された演題が、上のレベルの各学会で評価を受け、さらに立派な一流誌に学術論文として多数公表されたことは誠に嬉しい限りである。

4 中小臨の理念と方向性

中小臨の基本理念は、会員間及び全国の開業医間の情報の「Give & Take」である。本会がこれからますます飛躍するには、

- (1) 当会の原点に戻り、定例会発表を盛んにすること。それには会員同士が刺激し合って積極的に発表し、ディスカッションに参加する必要がある。

・会員各自が毎日の診察の中で、1例1例の症例を大切に勉強をし直すスタンスが発表に繋がるはずである。

- ・症例発表だけではなく、各自の病院紹介や開業に関するもろもろの問題の対応法（保険、法律、銀行、病院改装など）の発表でも良いと思う。

(2) 年1回の中小臨発表会のためには、全国各地の小動物臨床研究会にプロシーディングを送り、共同で行うことを積極的に呼びかける。

- ・全国の大学の図書館へ必ず送呈し、獣医学生に知ってもらう。
- ・当会のホームページ (<http://www.chubuvet.jp/index.html>) をさらに充実させる。
- ・当会員の病院で新しい検査装置や器具備品を購入する際は、中小臨のプロシーディングを見せて広告協賛を依頼する、などが考えられる。

5 おわりに

全国的に見て、このような臨床家が主体で純粹に発表会を行っている場合は極めて少ないと思われる。当発表会の特徴を全国の研究会に積極的に理解してもらい、これからは若い臨床家の先生方がまた発表したくなるような

魅力のある発表会を推し進めてほしいと念じている。

また中小臨の会員には、発表会当初の理念「Give & Take」を忘れずに自ら積極的に発表とディスカッションに参加されることを望んでいる。

追記：本研究発表会は昨年（2011年）で20回を迎えた。本文は第20回 中部小動物臨床研究発表会記念祝賀会の記念講演要旨である。これまでに長く本研究会が継続できたのは、地域の先生や後援研究会の方々が中心となって毎年貴重な臨床例を発表していただいたこと、また教育講演を担当していただいた方々にはアップデートな話題を提供していただいたことだと思っている。昨年12月11日に本会設立20周年の記念祝賀会を行った。本来ならば、長年この会を支えていただいた方々、協賛会社の皆様を招待し直接お礼を申し上げるべきところであったが、祝賀会の予算の一部を東日本大震災による被災動物への義援金に使用したため、会員のみで祝賀会となったことをお詫び申し上げたい。本年度より、代表を森島隆司氏（みどり動物病院、名古屋市）に引き継ぐが、今後ともどうぞよろしくお願い致します。 千村収一（中部小動物臨床研究会前代表）